

第3回中国・韓国・日本気象学会共催国際シンポジウムの報告

2007年11月14日～16日まで、標記会議が北京の中国気象局で開催された。この会議は、2004年に韓国気象学会の故 Moon 会長によって提案され、2005年の日本気象学会春季大会（会場：東京大学）に併せて第1回、2006年の韓国気象学会秋季大会（会場：ソウル近郊の国際会議センター）に併せて第2回が開催されたもので、今回が3回目となる。

今回の会議の開催に関わる中国・韓国との折衝には国際学術交流委員長の近藤があたった。参加者は韓国から60名、日本から21名、中国から129、総計210名であり、発表件数は119件と過去2回の会議に比べて大変盛況であった。

会議は、14日午前に総合会議が行われ、最初に中国気象学会の HUANG Ronghui（黄榮輝）副理事長から歓迎の挨拶があった。続いて韓国気象学会の Tae-Young LEE 会長と日本気象学会理事長の新野が開会の挨拶を行った（第1図）。開会の挨拶に続いて、3件の招待講演が行われた。最初に中国気象局の国立気候センター（National Climate Center）の DING Yihui 教授が「中国の気候変化」について話し、続いてソウル国立大学の In-Sik KANG 教授が「全球気候予測のための高解像度モデル」と題して講演した。いずれも会議のハイライトとしてふさわしい内容であった。最後に東京大学海洋研究所の新野が「改良 Mellor-Yamada 乱流クロージャモデルの開発とその大気モデルへの応用」と題して講演を行った。

14日午後からは3つの会場に分かれて一般セッションが行われた。開催されたセッションは、モンスーン、大気海洋相互作用、気候変化、数値モデル開発、大気化学、天気・気候と水、砂とダストストーム、台風の8つである。各セッションは各学会から1名ずつのコンビーナーが出て、プログラムの調整等を行った。日本からの各セッションのコンビーナーは上記のセッション順に、松本 淳（首都大学）、田中 博（筑波大学）、鬼頭昭雄（気象研究所）、佐藤正樹（東京大学気候システム研究センター）、近藤 豊（東京大学先端科学技術研究センター）、松本 淳（首都大学）、三上正男（気象研究所）、中澤哲夫（気象研究所）で



第1図 初日の総合会議で開会の挨拶を行う日本気象学会理事長。

あった。

会議の初日に行われた懇親会の後に、3つの学会の代表者数人ずつが集まり、今後のこの会議の継続の仕方について議論した。その結果、この会議は継続すること、開催頻度は2年毎とすることで合意した。また、今後の会議の開催のために、最低限の規約を盛り込んだ協定書を作るために、各学会から Secretary-General と国際学術交流担当理事の2人ずつ、合計6人からなる作業部会を発足させ、メールでの議論を通して、協定書を作成することで合意した。これに伴い、第4回会議は日本気象学会がホストを務めて、2009年の春季大会（つくば）にあわせて開催する方向で検討を進めることになりそうである。

会議の期間が IPCC の会議（スペイン）と重複しており、中国気象学会の Tahe QING 理事長が参加できなかったことは残念であった。講演時間の割り振り方や、ポスターセッション専用割り当てる時間の確保など、次回に日本で開催するときに改善が必要な部分もあった。今回の会議で、日本・韓国・中国と一回りした結果、お互いの国情も含めて相互理解が深まったというのが多くの方々の印象である。今後、この会議が、東アジアでの大気科学分野の学術交流にさらに重要な役割を果たすことが期待される。

（理事長：新野 宏）

（国際学術交流委員長：近藤 豊）